



境界あれこれ

6

～ 過保護と程々 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子

はじめに

子どもを育てる時、ついつい手や口を出してしまうということはどの親にも見られる行動だと思う。幼児期、よちよち歩きになれば、危ないことが無いように気を付けるのは当たり前である。一体いつ頃まで、どの様に、手や口を出していけばよいのか？あるいはどこから手を引けばよいのか？成長過程にある子どもたちの様子に合わせた関わり方とはということについて考えてみようと思う。

乳幼児期

「安全に気を付けながら見守り、
何でもさせてみる」

人間の赤ちゃんはかなり未熟な状態で生まれてくる。母乳やミルクを与え、おしめを換え、沐

浴させて体の保清を心がけ、ミルクの量、体重の増加、元気の良さなどから赤ちゃんの健康状態をチェックしていく。当然、手も目もかける話になる。

ただその時期であっても、泣いたからすぐ抱く、泣いたからすぐミルクや母乳を与えるというものでもない。泣くことは赤ちゃんにとっての運動にもなる。従って少しは泣かせることも大事である。ところが、近所への遠慮や寝ている夫等家族への配慮で、極力泣かせないようにと、少し泣いたと思ったら口をふさぐおしゃぶりを与えたり、抱っこや母乳を含ませるなどを繰り返していれば、赤ちゃんは直ぐに泣くようになることも多い。

ある母親が赤ちゃんを泣かせていたら、近所の人がピンポンと玄関ベルを鳴らしてきたので、何かと思ったら「赤ちゃん泣いてるけど大丈夫？なんでも手伝うから言ってね」と言ってきたそうだ。訪ねてきた人は良かれと思って来たのだろうが、尋ねられた母親の方は、泣き声がうるさかったか

らだと思い、以来泣かせないように必死になっていると言っていた。あまり泣かせていると通報されることもある昨今、母親たちが泣かせることに過敏になるのは分かる。しかし、少し泣かせることも、実は大事なのだと伝え、ピンポンと来ても、「大丈夫です。有難うございます。何かの時にはお願いに行きますから。」と言っておくと良いのではと伝えている。そうすることで、訪ねてきた方も、何かの時には頼ってくれると思えるし、嫌な気分させずに済むだろう。近所との関係性も保たねばならないから、中々大変である。

さて、赤ちゃんも少し大きくなってくると、おもちゃをなめたり振ったりしながら遊んでみたり、声を出して楽しんだり、メリーゴーランドなどを目で追ったりして遊べるようになってくる。ちょっとの時間に家事をしなければならぬので、赤ちゃんが一人で遊んでくれているのは有難いかもかもしれないが、あまり一人で遊ばせておくのも問題である。ここでもそばで見守り、声を出したときに声を返してあげたり、おもちゃをなめたり振ったりしている時に、おもちゃが手から落ちてしまったら、手につかませてあげたり、ちょっと声を掛けてあげたりということは、あった方がよい。早くひとりの時間をもちたいという親の気持ちもわからないではないが、もう少し我慢して、ゆったりと流れていく赤ちゃんの時間に合わせて、そばで見守ってあげてほしいと思う。つまりこの時期は、哺乳やおしめの交換等に加えて、口や手を出すことが必要となる。家事をしながらちょくちょく赤ちゃんの様子も見えるようにしておくとういだろう。

赤ちゃんにお座りができるようになると、関わる内容が変わってくる。向き合って座って間におもちゃを置いてやり取りしたり、お膝に抱っこして遊んだり、揺らしたり跳ねたりという少し大きな運動も喜ぶようになる。ガーゼのハンカチやハンドタオルなどでいないいないバーを楽しめるようになるのもこの時期。向き合って親子で楽しむとても良い時間が持てる。赤ちゃんに何度もガーゼのハンカチをかぶせたり、おもちゃを手渡

したり、もらったり、笑ったり、声を掛け合ったりと、赤ちゃんにとって親の存在がしっかり他の個体として認識され始める時期で、人と関わることの楽しさの基本生成上とても大切な時期である。

そして、這い這いで移動できるようになり、つかまり立ちや伝い歩きと言った動きができるようになってくると、赤ちゃんは親の後追いなどを始め、動く範囲が増大し、興味関心がどんどん広がって、いたずらが増える時期でもある。

この時期には危ないものを届かないところに上げるなど、安全を守る行動を親は取らねばならない。伝い歩みやつかまり立ちで転んでも大丈夫なようにと、マットなどを敷く人もいる。

ある母親は移動されることが大変だからと、這い這いをしようとするのを押さえつけたり抱っこしたりしていた。その結果這い這いが遅れてしまい、つかまり立ちも遅れた。

赤ちゃんは自分がお座りできるようになるころから、視界が広がり、色々なものが良く見えるようになる。立てばもっと視界が広がる。その様な中で、興味を持ったものを確かめようと動く。触ろうと動く。そうして移動が上手になっていくのである。従ってこの時期は、動けるスペースの確保が大事になる。いつまでもベビーベッドの柵の中にいさせたのでは運動能力の発達は不十分になるだろう。

この時期ケガするからとか、誤飲が心配だからとか、見てられないからとか、親の都合ですつと抱っこやおんぶで過しているのは、過保護な対応となってしまふ。赤ちゃんは転びながらバランスをとることを覚え、転びながら、上手に転べる術を獲得している。なんでもそこで手を出してしまつては発達障害を巻き起こしかねないのである。

また、転んだ時に、親が「あ！」と大きな声を出すと、大して痛かったわけでもないのに大きな声でびっくりして泣くようになったりもする。最初は親の声に反応しただけだったが、その後繰り返し転ぶ度に泣くようになったということも良

くある話だ。転んだ時に、「あらあら」とか穏やかな声で声掛けをすると、転んだらすぐ泣く子にはならないことも多い。

ひとりで歩けるようになってくると、行動範囲が一気に広がるため目が離せなくなる。家の中でも、気づくととんでもないことをしてくれたりする。2歳前後までは言葉での指示ではわからないことも多く、一番手のかかる時期でもある。しかし、子どもたちは親の行動をとともよく見ていて、真似ようとする。上手に真似られる行動もあれば、上手くできない行動もある。そしてこれ以降になると、もっとできることが増えてきて、なんでもやりたがる時期が来る。

この時期に大事なことは、出来ることをさせてみることや、ちょっとの失敗なら失敗させてみるということである。

コップに水を入れたがるのもこの時期から始まる。最初はお風呂の時に練習させればよい。濡れても大丈夫な状態なのだからどんどんさせてみよう。そうすれば上手になる。上手になってきたら、こぼしても良いようにして、テーブルの上でコップに水を入れさせてみる。ジュースや牛乳の場合もあるだろう。そうしてこぼしても、「あ～またこぼして～！」とか「もう！」とか言うのではなく、「こぼれちゃったねえ。じゃ一緒に拭こうか？」などと言いながら片付けていると、子どもは失敗することをあまり恐れなくなる。それは無鉄砲にするということではないので、危ないことについては手や口を出すべきだが、何でもかでも禁止や制止をするべきではない。

跡片付けが面倒だからと手を出していれば、自分でやろうとしなくなるし、失敗をなじらればかりいれば、失敗を恐れる子になるだろう。

2歳と言えども、出来ることはある。できることをさせ、多少の失敗を想定していれば、目くじら立てて怒ることも無いだろう。

こうして少しずつできることをさせていくのがこの時期大事である。それが子どもの自立心や自信に繋がっていく。幼稚園に行く頃になれば、自分で靴下や靴が履けたり脱げたり、ボタンやチ

ャックを掛けられたり、ごみ捨てや洗い物など簡単なお手伝いもできるようになってくる。自分のことは自分でと、厳しく育てられている子は、かなりのことができるようになる。

例えば、小さいころから手伝いをさせられている子は、5歳でも簡単な料理が出来たり、赤ちゃんの面倒を見たりできる。このあたりから、子どもたちの個体差が大きくなってくる。経験したことのないことにチャレンジする子としない子の違いは、やはり親がどれほどチャレンジさせているか、また失敗をなじらず、成功を認めているかにかかっていると思う。年長さんになれば年少さんの面倒を見ることになっている幼稚園や保育所もある。

幼児期の親の関わり方は、子どものやる気や興味関心、自尊感情や自信にととも大きな影響を与えらると思う。だからこそ手や口の出し過ぎは控えたい。親の都合でやっていることの大半は手や口の出し過ぎと思うとよいかもしれない。

小学生

「ルール内できるだけ一人でやらせて、
できたら褒める」

小学生ともなればかなりのことができるようになる。しかし、1年生の間は、幼稚園や保育所とは異なる環境でもあるし、親子ともども不安になっているので、どうしても親の口出しや手出しが多くなる。時間割をそろえる、持ち物の点検、服装管理、宿題や家庭学習など、親の手助けが必要なことも多い。毎日帰ってくると「友達出来た？」「勉強解る？」「発表しているの？」と質問攻め。給食が始まれば、「ちゃんと食べた？」となる。運動会の練習が始まれば、「駆けっこ何番だった？」等々。初めての参観日は親も不安の中であろう。質問攻めになる子どもの身にもなってみよう。負担にしかならない。

日々の準備や家庭学習などの一切を親がやる家も多い昨今だが、それではやりすぎである。最

初は一緒にやり、徐々に見守るようにして出来たことを褒めるようにすれば、どんどん自分でやれるようになるだろう。できないだろうと親が勝手に決めて、手出し口出しを続けていたら、いつまで経ってもできるようにはならない。例え発達障がいがあっても繰り返しやることでできるようになることはたくさんある。

世の多くの親は2年生になったとたんに「もう2年生なんだから自分でしなさい」という。学校の先生方も、1年生の時は手取り足取りの雰囲気強く、支援員さんも多く入っていたりと手厚いが、2年生になったとたんにガラッと変わってしまう。ある意味放っておかれることが増える。そうすると子どもたちの問題行動が増えてしまう。1年生と2年生の間にはっきりとした境界でもあるのかと思われるほどだ。子どもたちにも2年生になったという自覚を育てることはもちろん大事だが、急に態度を換えられてしまうと戸惑ってしまうだろうことも想定すべきだろう。

子どもたちにとってこの時期大事なことは何かと言えば、忘れ物をして先生に怒られたり、みんなの前で恥をかいたりしながら、自分のことを自分でやる大切さを覚えるということだ。なんでも親任せにしていれば、忘れ物は親のせいとなるだろう。これでは自立に結びつかない。

小学校低学年では、宿題や家庭学習、授業道具の準備、体操服、鍵盤ハーモニカ、給食袋など、必要なものの準備は自分でさせ、確認だけする。もちろん子どもからの相談にはのるし、質問に対しても一緒に調べるか、或いは即座に答えることもある。又最近では家の中が過ごしやすい温度になっていることもあり、外の温度や天気に合わせて服を選ぶということが難しいこともある。そういう場合は、親の一言が必要になるだろう。まだまだ手や口を出す機会が多いのが低学年だろう。歯磨きやふろの使い方などの確認も、この時期までは必要かもしれない。そして、危険な目に遭わないためのルールをしっかり決めておく必要がある。

高学年になってきたら、手や口を出す機会を減

らしていく方が良い。うるさく質問することも嫌がられる。思春期に入ってきているからで、自分のことを自分でやりたい、自分でやれるという思いが強くなる。この時期気を付けなければならないのは、子どもが面倒くさがって親の手助けを求めるときに、親が乗らない事である。最近の子どもたちは面倒くさがり屋さんが多い。何かを調べる、準備する、片付ける等、家庭でも学校でもやらなければならないことは沢山あるが、遊びたい、ゲームをしたい、テレビを観たいが優先されて、大事なことがなおざりにされる。

親はこの時期から手よりも口出しが多くなる傾向がある。「宿題やったの？家庭学習は？」「明日必要なものはないの？」「必要なものは早く言っておいてよ！」「お手紙ない？」「はやくやりなさい、早く、速く」等々。口うるさい。あまりうるさく言われると、「うるさいなあ、今出そうと思っていただよ！」とか「今やろうとしていたのにやる気が無くなった！」などと口答えも始まる。こういう時期は一つの境目である。「うるさいなあ」と言われるようになってきたら、極力言わないようにし、自己責任でやらせる方が良い。そして、出来なくて自分が困っても手伝わらない事である。夜遅くまで宿題を手伝ったとか、夏休みの宿題や自由研究などを親が手伝っているのを良く見聞きする。子どもの宿題を親がやってどうするのか？アイデアを一緒に考えると、出来ないところを教えてあげるくらいならともかく、全部親がやって出したなどと聞くと、何のための宿題なのか、自由研究なのかと思ってしまう。

高学年ともなれば、身の回りのことは殆どできるようになる。服装の選択もできるので、親は洗濯だけしておけばよい。家事も少しずつ手伝わせれば、料理でもなんでも大人と変わりなくできるようになる。要は経験値である。やらせていればできるのだから、やらせればよい。やけどをするかもしれないし、手を切るかもしれないが、それを親が怖がってさせないでいけばいつまでできるようにはならない。学校でも家庭科で包丁を持つ時期でもあるので、どんどんやらせてい

こう。

色々な経験をさせたり、知識を与えることで、自分が将来何になりたいか、何に興味をもてるかなどに気づくきっかけができる。旅行や色々な行事への参加もできる範囲でどんどんすべきだろう。

但し、この時期以降は、全く手ばなしで良いということではなく、危険な情報や危険な人からどう自分を守るかについて、スマホやパソコンを使っている子に対しては厳しく指導しなければならない。目や手を放してよいわけではないのである。見慣れないものがないか、様子がおかしくなにかなど、子どもの持ち物などもきちんと確認しておく必要はある。そういう意味では子ども部屋は親が自由に入り、片付けたりできる必要がある。

一人部屋を持つのは、中学生くらいからでよいが、兄弟関係とかいろいろな事情で小学生から一人部屋を持たせている家も多い。小学生の間はできるだけオープンな部屋が良いだろう。

中高生

「干渉手出しは極力減らし、子どもを信じ、自分のことは自分で悩み決めさせていく」

中学生くらいになると一人部屋の必要性もでてくる。親に対する秘密を作るのもこの時期であり、それも発達過程の一つなので、ある程度認めざるを得ない。

子どもを大事に思うあまりか、中学生や高校生の子と一緒に寝ている親に度々出会う。異性であってもお構いなしだ。家族全員でお風呂に入るといふ家族もあるが、それがその家のルールで小さい時から慣れていると何も不思議に感じないのかもしれない。しかし、年頃になれば、娘は父親と一緒に風呂に入ることや同じ布団で寝ることに抵抗を感じるのが一般的である。このころからは、明らかに境界が引かれるべきである。子どもへの干渉や強要、手出し口出しを一気に減らしていかなければならない。

中高生では勉強や成績、部活動など、ついつい親が口出ししたくなることもあるし、人間関係や生活態度、行動についても文句や叱責が増える時期でもある。もちろん未成年なので、手出し口出しは減らしても目を離すことはできない。最近は不純異性交遊も多いので、男女の関係にもある程度過敏になるのも、親として仕方がない。しかし、日々問題行動のかけらもない子まで、うるさく監視したり口出しすれば、そういうつもりがなかった子が、間違っただけに動いてしまうこともある。心配だからと子どもの持ち物を確認し、日記帳を盗み見する親もいた。そんなことをしていたら、子どもは家出をしてしまうかも知れない。

いじめに過敏になり、自殺に過敏になり、或いは男女関係、万引き、SNS等心配になるニュースがあふれている中では過干渉にならざるを得ないのかもしれないが、やはりここは、子どもを信じ、過干渉にならないよう気を付けるべきと思う。幼児期からずっと、自分や生き物の命を大事にすることや、人に迷惑をかけない事、法律を守る事など、基本的なルールを伝えていけば、この年代になった子どもは余り馬鹿なこともしないし、困ったときに話せる関係性を親子の間で築いていけば、そんなに干渉しなくても大抵は大丈夫だろう。

この時期もう一つ大事なことは、自分のことを自分で考え受け止め、悩み、行動し、失敗し、立ち直る経験を繰り返しておくことである。そのためには、親が先取りをしたり、行動を決めたり、失敗しないようにと導くことはしない方が良いでしょう。それが子どもの精神的自立に向けての大きなステップになる。

高校卒業後

「親からの自立を促す」

高校を卒業したら、大学や専門学校或いは就職かに関わらず、出来るだけ一人で生活させ、親からの自立を物理的にも促すことが必要になる。家

から大学や専門学校に通う場合も、自分のことは自分でさせること。子どもから言って来ること以外は余り根掘り葉掘り聞いたりしないこと。もちろんそんなに色々聞けば子どもが嫌がる。しかし時折、良い子を続けて、嫌がる様子を見せず、小さい時から変わらぬ素直で親好みの子でいようとする子がいる。これは決して子どもにとっても親にとっても良いことではない。あまり物分かりの良すぎる親でいると、子どもは反抗することも無く、壁を破るという行為をしないまま大人になんとなくなってしまふのではないかと思う。薄いか厚いかの差はあるかもしれないが、大人になる・自立するための壁があって、それを自分の力で破れると自信につながるのではないか。その壁を作ってあげることが親の務めである。

まとめ

こうしてまとめてみると、過保護と程々の境界は、その時代時代で違うが、要は子どもの成長を

考え、自立を考えて行動するかどうかによるということになるのではないか。程々より放っておくことになれば今度はネグレクトとの境界を考えることになるだろう。

過保護は、子どもの自立を妨げるだけではなく、精神的成長や失敗に対する耐性や、やり直す勇気を殺いでしまう。そしていつまでも親から乳離れできない子にしてしまう。多くの子どもたちが、未熟で幼いまま親になって行っている今の時代、乳幼児期から大人になるまでの間の親の関わりを今一度考えねばと思う。親は、子どもを中心に子どもの成長に応じ、物理的にも精神的にも徐々に離れて行くべきで、その距離が遠すぎず近すぎず程々であることが求められる。程々ほど難しいものはないが、子どもができること、出来そうなことに気づき、手出し口出しをせず、見守ったり、応援したりする姿勢ができれば、それが恐らく程々なのではないかと思う。